

作物名:いちじく

病虫害名:株枯病(病原:*Ceratocystis ficicola*, *Ceratocystis fimbriata*)



写真1 主幹に発生した紡錘円形の病斑

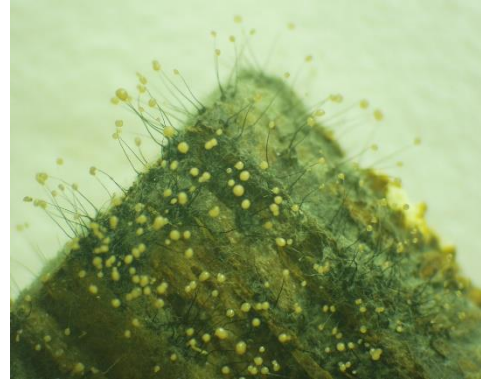


写真2 子のう殻(黒色髪毛状)と胞子塊(子のう殻先端の黄色の塊)

1 被害の特徴と診断のポイント

- 主幹部の地際部や主枝に、不規則で茶褐色～黒褐色の大型円形病斑を形成し腐敗する。
- 病斑を生じた側の上部の枝が日中萎凋し、病斑の拡大に伴って周囲を取り巻くと樹全体が萎凋し、最終的には枯死に至る。
- 根の基部から本病原菌が感染して腐敗させ、さらに幹の樹皮下を侵し、最終的には木質部を腐敗枯死させる。
- 症状が進むと、葉が日中萎凋し、萎凋と回復を繰り返して、次第に下葉から黄変落葉する。
- 病斑部には、多湿条件下で黒色髪毛状に突出した子のう殻が多数形成される。
- 本病は、いったん発生するとほ場内に急激にまん延し、成木も枯死するため、被害が大きくなる。

2 伝染源・伝染方法

- 主に、土壌伝染および苗伝染する。伝染経路としては、罹病苗からの持ち込みが大きい。
- 病斑上に生じた子のう胞子や分生胞子が風雨によって飛散することによっても伝染すると考えられるが、土壌伝染ほど急速には拡大しない。
- 本病原菌は、土壌表層から深さ15cm程度までの比較的浅い部分に多く、土中深くでは生存しないといわれている。
- 目立った病徴がみられなくとも、本病原菌が樹体内を侵して新梢まで感染している場合がある。このような樹から挿し穂を採取すると、汚染苗の育成につながる。
- 福岡県の報告によると、アイノキクイムシが本病原菌を保菌し媒介することも確認されている。
- 本病原菌は、いちじくのほかに桑、シラカシ、クロマツ、カラマツなども侵す。

3 発病しやすい条件

- 地温25～30℃で発病が多い。感染は6～9月に多く、葉の萎ちょう・落葉などの症状は高温乾燥時に発生しやすい。
- 本病原菌は糸状菌の一種で、生育適温は25℃前後、子のう殻の形成は25～30℃、分生胞子の形成は20℃で最も多く、胞子の発芽は25℃付近で最も良好とされている。

4 防除方法

- 本病は苗伝染するので、必ず健全な苗木を植栽する。また、本病発生ほ場では、穂木採取や苗木育成を行わない。
- 発病を認めた場合は早期に抜根し、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

- 発病樹の根部や表層15cm程度までの土壌は本病の胞子で汚染されているので、汚染土壌を除去し汚染されていない土壌を客土する。
- 薬剤防除として、発病樹周辺の健全樹を対象に、株枯病に適用のある殺菌剤を土壌灌注する。なお、すでに感染している樹には効果がない。

5 出典

(1) 参考文献

- 平成23年度発生予察情報 特殊報第1号「イチジク株枯病の発生について」(宮城県病虫害防除所)
- ひと目でわかる果樹の病虫害第二巻(改訂第二版)(日本植物防疫協会)

(2) 写真

- 宮城県農業・園芸総合研究所園芸環境部病害チーム撮影
- 宮城県亘理農業改良普及センター撮影
- 宮城県病虫害防除所撮影



写真3 発病した若木の様子



写真4 地際部の病斑



写真5 主幹罹病部の切断面

(令和7年5月作成)